
Fate/another Zero

水無瀬 睦月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/another Zero

【Nコード】

N5942Z

【作者名】

水無瀬 睦月

【あらすじ】

あらゆる“奇跡”を叶える「聖杯」の力を巡って、七人の魔術師^{マスター}が覇を競い合う究極の決闘劇……聖杯戦争。その戦いのはてに命を落とした間桐雁夜は言峰の長女として再び生をうけた。とりあえず時臣を殴ってやろうと画策するが、雁夜だったところとは余りに違いすぎて……

一部(?)キャラ崩壊してます

基本のノリは軽いですが、時々シリアスになります

歳の差が公式と違うのは仕様です

Act 0 Fate

一步、また一步と着実に、雁夜は教会へと歩を進めていく。だがその倍以上の速さで、体内の刻印虫が彼の生命を蝕む。耳を澄ませば、血肉を嚼り、骨を削り喰らう蟲の鳴き声が聞こえてくる。じくじくと身を苛み続ける刻印虫の痛みは、すでに雁夜にとって呼吸や心臓の鼓動と同じく肉体の一部となっていたため、それに雁夜が意識をとられることはないが、血の気をなくした肌の下で蟲がうごめくのに合わせ、引き攣る皮膚は雁夜以外の人間がいれば目を逸らしたくなるほどに醜悪だ。意識は常に朦朧とし、気を抜くと時間の経過すらあやふやになる状態で、それでも雁夜は一步、また一步と足を運ぶ。

全ては決して許すまいと自らに誓った願いのためである。

あと何回、戦えるのか。

あと何日、生きていられるか。

そんなことは自分自身にもわからない。この手に聖杯を掴み、桜を間桐から救いだし、あの人に笑顔を取り戻させるなど、それこそ奇跡に期待するしかないのではないか。ならば己は祈るべきなのだろうか。

(冗談じゃ……ない……ッ！)

そんなふうにな弱気になるたびに、雁夜は自らを呪うように叱咤する。なにも自分はありませんし救いをもとめて、ここに来たわけではない。葵を奪った時臣を、桜を棄てた時臣を、この手で叩き伏せるために雁夜は祭壇の前に立つ。胸に燃え盛る憎悪の炎は、肉体の痛みも、葛藤も絶望もすべて灰にした。今の雁夜は敗北の恐怖も忘れ、憎い相手の心臓をえぐり取り、その返り血を満身に浴びることだけに焦がれていた。

軋む扉を渾身の力で押し開け、なんとか身体をいれるとそこには思ってもいなかった光景が広がっていた。礼拝堂の中を柔らかく照らし出す燭台の灯とは裏腹に、凄惨としか言いようがなかった。全身の血という血を、内臓という内臓をぶちまけ変わり果てた遠坂時臣がそこにあった。無事に残っているのは頭部だけでそのほかはもはや、人としての姿を保っておらず、ただの肉片となり辺りに散っている。

「
」

混乱と衝撃は、実際にハンマーで頭を一撃されたのと同等の破壊力でもって間桐雁夜に襲い掛かった。抜け殻のように虚ろな死相は紛れもなく本物であり、その容貌は疑いの余地なく遠坂時臣のそれだった。その時点で雁夜には、時臣の死を事実として受け入れるしか他になかった。

「
な 何 何故……？」

足元に散らばる時臣だったものに気をかけることもなく、近づきそして唯一残っていた時臣を抱き上げ、見つめる。見下しきった高慢な冷笑も、慇懃で冷酷な口調と嘲りの言葉も、そこにはなくただ“無”があった。
そして

「……雁夜、くん？」

その後のことはあまりよく覚えていない。いや、思い出したくないだけなのかもしれない。ただ一つわかったのは雁夜は、一つ間違っていた。

「バーサーカー……」

自分はやり方を間違ったのだ。桜は決して監禁されていたのではなかったのだから、昼間のうちに遠坂に無理にでも連れていけば、有能な魔術師である時臣のことだ……娘が蟲の苗床にされていることはわかっただろう。

「……残り全ての令呪をもって命じる」

結局一人よがりな英雄願望に踊っていただけなのだ。その結果がこれだ。

「俺を殺せ……」

その日たった一人のためにヒーローで在ろうとした男の人生に幕がひかれた。

神秘学の語るところによれば、この世界の外側には次元論の頂点にある『力』があるという。ありとあらゆる出来事の発端であり終焉、この世の全てを記録し、この世の全てを創造できる神の座。それを魔術師は『根源の渦』といいそれに到ることを悲願としている。しかし実際はそんなものではないと、世界をのぞき見ていた神はせせら笑う。世界の外とはまた別の理を持った世界があることであり、出来事の発端も終焉も、全ては数多いる神の気まぐれ一つ。そんな事実も知らず、世界の外へ到ろうとする愚かな魔術師達が、その神はどうしようもなく愛おしかった。

「想いに焦がれ死ぬ…か、いやはや人間とはどうしてこつても愚かで愛^{かな}しいのだ。やはりこの手で一度造ってみたい…」

神に名を連ねるソレは呟く。しかし、それは容易ではない。始まりの闇たる神が、初めて造りあげた出来損ないの欠陥品だが存外、人というものは複雑である。

「器くらいは造作もないが魂となると些か荷が重いな」

だが、不可能ではない。

ソレが覗いていた世界はもっとも神に近い。そこでなら干渉もしやすく、尚且つアレがいる。

「ちよつと壊れた器もあることだしな」

世界を一瞥。映るは、壊れた一人の男。

「どつせなら完全に道を壊すのもまた一興か」

どうせアレのおかげですでに道は歪んでいる。神自ら歪みを加えることは、不敬なことであるが、すでに歪んだものを壊すことは咎められるものではない。

「さあ、楽しめよ間桐雁夜」

同日、カラカラと音をたて、廻っていた歯車がその動きを止め、新たに風がふきはじめた。

始まりは三人の魔術師だった。アインツベルン、マキリ、遠坂、彼らが企てたのはありとあらゆる願望を実現させるという聖杯の召喚。三家の魔術師は互いの秘術を提供しあい、ついに『万能の釜』たる聖杯を現出させることに成功した。……だが、その聖杯が叶えるのはただ一人の祈りのみ。それから協力関係は血を血で洗う闘争へと形を変えた。これが『聖杯戦争』の始まりである。以来、60年に一度の周期で、聖杯はかつて召喚された極東の地『冬木』に再来する。そして聖杯はそれを手にする権限を持つ者として、7人の魔術師を選抜、その膨大な魔力をもってして『サーヴァント』と呼ばれる英霊召喚を可能とし、誰が担い手として相応しいか死闘でもって見極める。

「告げる」

男は紡ぐ。この世でただ一人、悲しませなくなかった女性ひとを想い

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に」

間桐の魔術『刻印虫』を擬似的な魔術回路とし、その身を糧に魔力を練り上げる

「聖杯の寄るべに従いこの意、この理に従うならば応えよ」

蟲に犯され頭髪が残らず白髪になろうとも

「誓いを此処に」

左半身が麻痺し、二度と機能が戻らなくとも

「我は常世総ての善と成る者」

寿命がもつてあと三週間程度だとしても

「我は常世総ての悪を敷く者　されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべしっ…くっ」

振り返らず、立ち止まらなかつた。刻印虫を刺激し活性化させる負担は、四肢を痙攣させ、端々の毛細血管を破り血を滲ませる。それでも、彼は精神の集中を緩めない。

（桜ちゃんのために、何より葵さんのためにも俺は、ひけないんだ
！！）

願いは己ではなく自身の、最も大切な女性むすめのために。

雪が深々と降る。空を舞う六花は辺りを覆い、昼とは一転し白銀の世界を作りだしていた。12月25日：キリストが生まれたとされる日に、イタリアの病院で一つの命が生まれた。大きな産声を上げ、元気に生まれてきた女の子は『言峰綺璃』と名付けられた。

「ふふつ、そんなところに立ってどうしたの？綺礼」

産後の経過もよく、生まれたばかりの娘を抱きながらあやしていると病室の入口に長男、綺礼が立っていた。いらっしやいと、手招きすればベットまで寄りしげしげと、腕に抱かれている妹を覗き込む。

「…赤ちゃんってこんなに小さいんだ」

感心したように言う、常ならない息子の様子に微笑み母は冗談交じりの言葉をかえず。

「あら、この子はおっきいほうなのよ。あなたなんでもっと小さかったんだから、もしかしたら妹のほうがおっきくなったりしてね」
「それは…いやだ」

それに今年14となる兄、言峰綺礼はムスツとし眉間にしわをよせるが、赤ん坊のことは今だ興味深そうに見つめている。しかし、その小さな手に触れようと手を伸ばしたが、途中で引っ込めてしまった。揺れる瞳に妹を写し、その視線には愛おしさが宿っているが、触れることはしない。そんな綺礼を見て母は苦笑を一つ零し、大丈夫よと笑う。

「代行者であることを気にしたの？」

「…はい」

10代から異端討伐の殺人部隊に所属している綺礼は、生まれたばかりの妹に己の、朱に浸かった手で触れていいのかと躊躇したのだ。

「そう…よかった」

「はあ？」

「だってあなた、ちつても子供らしくないんですもの」

小さいころから凡そ目的意識もなく、心を動かすこともなかった。代行者に任命され、殺人を仕事としなくてはいけなくなったときも、返事一つで承諾した綺礼。そんなどこか空虚な人間だった息子が、躊躇した。そのことが嬉しいのだと母は破顔する。

「それにね綺礼。この子は特別なよ、何てったって神様の類い稀な加護を受けているんですもの」「神様の？」

「ええ、神様の。あ、でも父さんには秘密よあの人…それを知ったら絶対に報告しちゃうもの」

だから触れても大丈夫よ。あなたが気にしてても神様パワーでそんなのものともしないんだからと、悪戯っ子のように笑う母にっられて綺礼も笑った。

「だからこの子を護ってあげて」

才能というプレゼントをもらって、神からの加護を受けているといつても、今だ幼く自分を守ることが出来ないこの子をよろしくね

と母は笑った。

「はい。」

それにしつかりと返事をし、今だ揺れる瞳で綺璃を見つめ、触れるべきか悩んでいる綺礼の服をキュツと、握った小さな存在に戸惑いながら確かに綺礼は、その日初めて心を動かした。
何が確かに変わり始めていた。

言峰綺璃。それが今世での名前だった。かつて敵として相対した男の妹になるなんて、どんな運命だと元、間桐雁夜は嘆息する。

(はあ、しかもイタリアなんて)

まったくもってついていない。日本の冬木にいたならば、あの時臣と葵さんが接触する機会を潰してやるのに。

(いや、ましてよ...)

むかつくことに時臣と雁夜は、幼なじみというやつだった。そして自分は幼児、ということはあの憎たらしい時臣も幼児。

(だったら今は魔術とか、武術をとことん鍛えるか)

かつての自分はそれで失敗した。一年たらずで魔術師になろうとし、知識もなかったため臍に躍らされ、あげくの果ては終盤に自分が間違っていたことに気付き自殺ときた。今思いかえしても、顔から火がでるくらい恥ずかしいし、泣きたいほどに情けない。

（だけどこれで今度こそ葵さんを笑顔にできる）

もう二度と同じ間違いは犯さない。この身体では彼女と結ばれることはないが、それでもかまわなかった。彼女が笑顔でいられる未来が作れるのであれば。

（まってるよ時臣！！）

就寝前のベットで固く誓うが、綺璃は二つ忘れている。一つは今の自分は、雁夜だったころ10は下であろう綺礼の、さらに14下の妹であるということ。そして、妹を護るという目的をもち、超絶シスコンへと進化を遂げた兄と、目に入れても痛くないほどに親バカ全開で、猫可愛がる父がそう易々と魔術や武術を習わせてくれるわけがないということ。道は果てしなく遠そうである。

朝一でおねだりしてみたが光速で却下された。

曰く、魔術師と教会は相容れないのだから諦めなさい。

曰く、かわいい顔や大事な身体に傷がついたらどうするんだ。

曰く、兄さんが護ってやるから心配するな。

曰く、そもそも俺より弱い奴に教えをこう必要はない。以下エンドレス。

(まともな意見が一番最初しかないってどういうことだよ)

せめて母がいてくれればよかったのだが、あいにく母は今フランスに友人達と旅行中である。

「あー、兄貴」

「…はあ、何度も言うが綺璃、お前は女の子なんだ。それらしい言葉遣いをしなさい…いや、まてよただでさえかわいいのに、言葉遣いを治してしまったら余計な虫が…いやでも」

さらには脱線し、話が全く進まない。これが外に出ると過保護なお兄様で済んでしまうのが怖いところである。つくづく、自身のまさに病弱で物静かなお嬢様といった容姿が恨めしい。

先祖帰りだか何だから、日本人離れた顔立ちに、白銀の髪に空を写したような瞳。兄も最近ではよく笑うようになり、二人揃っていれば眼福間違いないのである、ただし今だに男言葉が、抜けない綺璃が口を開かなければという注釈がつくが。

「とにかく、魔術も武術も諦めなさい」

「はあーい…」

少々、行き過ぎではあるが父も兄も自分を心配しての言動なのだと納得し、いざという時は兄に時臣をとっちめて貰おうと、些か黒いことを綺璃が考えていると轟音を響かせて玄関が蹴破られた。慌

ただしくリビングから玄関に向かう兄と、父についていくとそこには旅行中であるはずの母が悠然と立っていた。

「あなた、それに綺礼？私いましたよね綺璃が、自分から魔術を習いたいといったら許可してあげて下さいと」

その美しい顔は確かに笑っているのだが…それは見るものを恐怖のどん底に突き落とすものでしかなかった。それ以前になぜ、いなかった時の会話まで把握しているのだろう。そんな母に父はともかく、あの兄まで顔から血の気が引いている。思わず綺璃は止めようと母の袖を引っ張るがやんわりと制され、それ以上にも出来なくなってしまう。しかし次の言葉で綺璃も血の気をなくした。

「それに、もう遠坂には許可をもらってますの。と、いうわけで魔術を習いに行くわよ綺礼、綺璃」

「は!？」

確かに魔術を習いたいと言った。だがなんでよりによって遠坂なのだ。しかし、遠坂を雁夜でなく綺璃が知っているはずもなく、結果反対も出来ずにあれよあれよというまに飛行機に乗せられ、兄と妹は、母と灰になった父に手を振り日本に旅立ったのである。

「あに…兄様、遠坂って何ですか」

出発ぎりぎりまで母によって、行われた教育という名の拷問のおかげか、女言葉、それも淑女（レディー）のようなそれは思ったよりも、嫌悪も違和感もなくスルリと口から出てきた。そのことにダ

メージを受けながらも、今は情報収集が第一だと綺礼に尋ねる。

「ああ、宝石魔術を得意とする一族だ。特に次期当主と名高い遠坂時臣は才はそれ程でもないが、努力と修練でもって一流の魔術師まで上り詰めた人物だ」

（あの、時臣が？）

にわかには信じられなかった。だが、やはり自分が綺礼の妹として存在している世界だ。雁夜だった世界との差異はあるだろう。少なくとも間桐雁夜の知る、遠坂時臣は才に溢れ誰よりも魔術師らしい奴だった。

（この時臣は違うのかもな…）

気にくわない時臣。だが、こことかつて雁夜の幼なじみであった時臣とは同一ではないのだと認識し直す。だからといって時臣に対する苦手意識も、憎悪もなくなったわけではないので自分から近付くことはないだろう。

「そうそう武術は俺が、気にくわないが魔術に関しては、2人ともその遠坂時臣に指示することになるそうだ」

「ふえっ？」

「何だ、意外だったか…俺が魔術を学ぶことにしたのは綺璃を護る手段を増やすためだ。いうならば、魔術師ではなく魔術使いといったところだ」

「いえ、それはありがたいのですが…」

「？、ならば行くぞ先方がすでに迎えに来ている」

2人分のカートを片手で押す、兄に手を引かれ到着ロビーに向かう間、綺璃の頭は真っ白だった。いくら雁夜であったころよりも数

倍、才に溢れているといっても“あの”時臣に師事することになるなんて…いくら同一でないといても大変遠慮したい。が、対立関係にある教会と魔術協会の現実を考えれば、簡単に変更等できないだろう。しかも相手は御三家の1つ遠坂である。喜ばれることはあっても、拒否される理由がない。

(詰んだ…完璧に…)

せめてもの救いは兄も一緒であることだが、兄は超絶シスコンであるが認めている相手に対しては、著しくそのガードが低くなるのである。今回は母の紹介である上に、遠坂時臣の人柄はともかく実力とそこに到るまでの努力は認めている。つまり兄を使って時臣に危害を加えることは不可能。

さらにいうならば出発間近にやっと、時臣との年齢差をしつかりと理解した。時臣は綺璃の8つ上、現在13歳である。年少の身ですでに次期遠坂家当主と名高い彼に、自分ができることは現時点では皆無。いくら才に溢れていようが、後数年の内に彼に追いつき、追い抜くのもまた絶望的。

そして追い撃ちをかけるように、到着ロビーで待つ人の中に雁夜の記憶にない男に肩を抱かれ、赤ん坊をその手に抱き、ベビーカーを押す“遠坂葵”の姿を目にし綺璃の目の前は真っ暗になった。

シヨックだった。時臣が兄より六つも下だということも、葵が雁夜だったころにはいもしなかった、得体のしれない男と結婚していることが。

(…遠坂邸か)

目を覚ますと知らない部屋だった。気を失っている間に運ばれたらしい。見覚えはないが、荘厳な室内の雰囲気からあたりをつける。

(誰なんだろうな…アレ)

遠坂の分家筋のものだろうか。だとしたら幸なのかもしれない、魔術は基本一子相伝。時臣が変わらず次期当主ということは、あの男は魔術と何の関わりもない可能性が高い。

(とんだ皮肉だな)

理由がなくなってしまった。雁夜だったころの願いを、叶えたいがために魔術を身につけることを望んだのに、すでに彼女は幸せそうだ。つくづく己というものはタイミングを逃してばかりいる。

(なのに時臣に魔術を習わなくちゃいけないなんて…)

がっくりと肩を落とし頭をたれる。今更、断れるわけもない。しかも師事するのは時臣だ。二重の意味で苦痛である。それに引きず

られ、雁夜だつころの時臣にうけた諸々の所業も思い出されたらしく、ベットの上でさらに綺璃はうなだれる。そんな綺璃の意識を現実に取り戻したのは一つのノックだった。そうして入ってきた男に綺璃は目を丸くした。

「遠坂…時臣？」

「なんだ知ってたのか。だが初対面の年上を呼び捨てにするとはいいられないね」

相変わらずな時臣にやっぱり嫌いだと再認識し、すぐにベットを下り礼をとりながら、笑顔を張り付け迎え撃つ。

「失礼しました。言峰璃正が長女、綺璃です。」

「知っているようだ。遠坂時臣だ。智由紀さんには従兄弟が随分と世話をかけたね」

「母がですか？」

初耳だ、そして従兄弟とはあの得体のしれない男のことだろうか？

「ああ、詳しくは陸さんから聞くといい。そっちの方面では君の母君は有名だからね」

「は、はあ…」

有名って何したんだ母さん…とツツコミたいし、気になる綺璃だったが、おそらくその陸さんとやらに聞く勇氣はでないだろう。笑顔一つで代行者である兄を、押さえ込める母の秘密なんて、藪を突いて蛇なんてかわいいものじゃないと本能が警鐘を鳴らしているためである。

そんな綺璃について来なさいと一言告げ、絨毯が敷き詰められた廊下を歩きながら屋敷内の案内を始めた時臣は、おもむろに口を開

いた。

「聞いていると思うけど君達に僕が魔術を教える。正直、君は僕なんかよりも魔術の才に溢れている。だからこそ智由紀さんも無理を通したのだろう」

魔術師の世界では利害のぶつかったのならば、たとえそれが血縁であろうが師弟関係にあらうが、殺しあい発展することは珍しくもない日常だ。

そしてどこまでも魔道をつきつめ、時に倫理や道德すら捨て去るのが魔術師である。そんな魔術側と対立する教会側に、魔術の才の塊といっても過言でもない存在がなんの知識も持たず、教育も受けてない状態でいればそれは、言葉は悪いがいい“カモ”だ。

「ここまで言えばわかるね？君はなんらかの目的があつて、魔術の道に入ったのかもしれない。だけど目的以前にまずは、自分の身を守れるようになりなさい」

「はい…」

「よし。それじゃあ修業の間はこの部屋を使ってくれ。今日のところは何もしないから休んでくれていい、それじゃあ」
「ありがとうございます」

わざわざ覚悟を決めさせるような言い方をしたのは、彼なりの優しさなのかもしれない。そういえば自分がまだ、魔術から逃げ出していなかったころは今のよう、気を使ってくれたこともあったかもと、綺璃は思い起こす。

時臣との間に溝ができたのは、高校に入り本格的に魔術から逃げようになつたころだった気がする。それまでは、特に仲良くもなかったが普通の幼なじみだった。きっと誰よりも魔術師たらんとした時臣に、魔術から逃げる雁夜の姿は何よりも忌むものとして写っ

たのдарろう。

「だからっていつでも嫌いだけどな」

推測通りだとしても、そもそも生粋の魔術師たろうとする時臣の思考が、綺璃は理解出来ないので結局、この先も嫌いなままだろう。見下されてないだけマシかもしれないが、才に見合うだけの魔術師らしさを身につける、等と言われたらキレル自信がある。

「修業は明日からか…はあ、憂鬱だ」

深いため息をつき、荷物を整理すべく綺璃は部屋の隅にあったカバンを引き寄せ、チャックを開け、そして固まった。

「え、嘘っ!!…なんでさ!？」

溢れだしたのは、ピンクにオレンジ、セルリアンにピスタチオグリーン。さらには繊細なレースの雨嵐に、可愛らしいランジェリー。自分で詰めたはずの、ボーイッシュで機能性を優先した服は影もなかった。極めつけは同封された手紙で、

「素敵なレディーになって帰ってきてください。遠坂の家訓は“常に優雅たれ”なので丁度良いでしょう P.S. この修業は遠坂の奥様にお願ひしていますので、逃げたりしないように 母より…
…絶望だ」

またあの地獄が始まるのかと綺璃は涙する。

柔らかかそうだが癖のない肩にとどく白金の髪は風に揺れ、海を掬いとったかのような瞳は陽光に反射する。西洋人形を思わせる整った容姿と、外国の血が入っているための色合いは彼女に良く似合っていて “綺麗だ” そう素直に思った。

「これはまた… 凄いのがきちやったね」

「確かに魔術の才は桁違いだときいています…」

向こうから歩いてくる兄妹をみながら従兄弟が言う。どこか感心する従兄弟を見上げるが、彼が言いたいのはそういうことではなかったらしく、首を横に振られ、何時ものどこか緩い口調が一変する。

「流石は智由紀の娘、か… 凄いのがお守りについてる。正直、今からでも “こつち” に引きずりこみたい」

彼女 言峰綺璃の背後を鋭い目でみながら口元だけで笑いながら男、篠崎陸は言う。が、そう易々と貴重な人材を墮とされては敵わないので、釘を刺そうとすると目前まで迫った少女の身体が力を失い倒れた。幸い、兄が抱き留めたので打ち付けられることは、避けられたが完全に気を失ってしまっているようだ。

「智由紀と違って、身体は丈夫じゃないのかな」

「… そうかもしれないですね」

突然切り替わる相変わらずな従兄弟に、脱力しながらも早く屋敷に運んだほうが、良いだろうと思ひ、射殺さんばかりにこちらを睨みつける兄に深く一礼。

「遠坂家次期当主、遠坂時臣です。言峰綺礼さんと綺璃さんで間違ひありませんね…迎えにあがりました」

荷物の整理を終えた綺璃は、兄の元へ向かおうとした。時臣による魔術の修業は明日からだが、兄よる武術の修業について話を聞くためである。シスコンな兄が、倒れた綺璃を修業させるわけではないが、それでも一応と思い部屋を出ようとしたが、そこで気づいた。自分が今いるのは魔術師の家だということに。

(まずつたな…)

先程の案内のなかで、入ってはいけない部屋は最低限説明をつけたが、屋敷ないに仕掛けられた諸々の罠も、命に関わる物は教えられだが、それ以外のものは教わっていない。間桐ばりの陰湿で家の者もウツカリ死ぬものが、ホイホイとあるはずがないが、無傷で兄の元までたどり着くのは無理だろう。それを強行すれば、時臣を最低レベルではあるが認めている兄は、間違いなくその矛先をこちらに向け昏々と説教するに違いない。

(とりあえず、誰か来るまで大人しくしてるか)

家のものは来なくても、綺礼は間違いなく来るだろう。そうまとめ、暇つぶしに本でも読むかと備え付けの、本棚から本を抜き取ったのが運のつきだった。ガチリと何かが外れる音がし、急いで離れる綺璃だったが時既に遅く。マンホールよろしくぼっかりと空いた足元の穴に、悲鳴を上げる間もなく落ちていった。

「で、ご丁寧に俺だけ呼びだして何のようだ…生臭さ坊主」

殺気立つ綺礼を前にしてもヘラリとしているのは『篠崎陸』。綺礼は坊主といったが、正確にはそうではない。

「だから俺は、坊主じゃなくて〜チョー有能& a m p ; 万能な“被い師”なんだってば〜」

「そんな名称がない以上、寺の住職のお前は生臭さ坊主で十分だ」

悪魔に悪霊、なんでも御座れ、あなたの悩みも被います。とは当人の弁だが、全くもって信用も信頼もないので自然、綺礼の言葉もきつくなる。それを気にした様子もなく、ヘラリとまるで今日の夕飯の話をするような気軽さで、陸は特大の爆弾を放り込んだ。

「妹ちゃんこつちの才能は並だけど〜チョー強い保護者が憑いてるんだよね〜…寄越す気ない？」

最後の言葉だけ、目を鋭くし綺礼見遣るが即答で断られてしまう。それに残念だと、軽く言うつもり出していた身を引き、コーヒーを一口。どうやら話は終わりのようだ、しかし部屋を出ていこうと立った綺礼に陸が、最後に投げかけた言葉に再び綺礼は、腰を下ろすことになる。

「あ、でも…妹ちゃん今“壺”の中にいるんだよね〜」

どろりとした闇だ。この世の怨嗟と怨恨と嫌悪だけを煮詰めたような暗闇に知らず、身震いをする。高さにして10mほどだろうが、高さがあつたにも関わらず綺麗は無傷だった。しかしそのことを疑問に思う間もなく、答は既にあつた。

床が見えない程に積み重なり、打ち捨てられた腐臭を放つ骸が下にあつた。爬虫類に始まり猫に犬、中には間桐の蟲のようなものである。それらは切り刻まれ、ぶちまけられた臓腑と血は既に乾きはじめている。嫌悪に顔を歪めてもまだ、冷静でいられた。かつて間桐雁夜であつたころ、用済みだと母が蟲に喰われていく様を、蟲に犯され心を壊され身体を病んでいく少女の様を見ていた綺麗は、この程度で動揺することはなかった。

所詮、ここにあるのは自分に全く関係のない物言わぬ骸。そう思い、骸の山から埋まっていた足を引き抜いたときそれは見えた。鎧だ。古めかしいそれは西洋の物でフルプレートのものには腹部に特大の穴が空いており、そこからちぎれた腸が垂れ下がっていた。

「……!?!」

一瞬思考が止まる。自分には無関係だと割り切り冷静でいられたのは、自分と同種がそこにいなかったからに他ならない。だが、天秤は傾いた。今まで気にもしていなかったもの全てに、吐き気を覚え、堪えきれず嘔吐する。タイツに染み込んだ血が、辺りを覆う腐

臭が、散乱する臓腑が、その全てに人のものも混じっている。そう自覚したときどうしようもない恐怖を覚えた。だが悲鳴は喉に張り付き、声にならない。

(どうして、なんで、何のために…)

思考もループし纏まらない。だが綺璃は気付かない、パニックに陥り完全に冷静を失っている。パニックは人間の生存本能であり、生き残るための手段だ。死に物狂いで、脇目も振らずその場か逃げるために、パニックを起こす。だが、この場においてそれは最悪の一手だった。後ろで何かが動く。重たい何かを引きずるような音をたて、綺璃に一步また一步と近づくが、綺璃はそれに気づけない。そして、背後に立たれ影が伸びたことでやっと気づくが時既に遅く、綺璃はその息を止めた。

投擲されたナイフが、コーヒーを置いた陸の手ギリギリに刺さる。それを眉一つ動かさず抜き、全く同じ軌跡で綺礼の元に帰す。が、綺礼も慣れたもので何事もなかったかのようにナイフを受け取り、懐にしまう。

「いつになく余裕がないね、お兄ちゃんは」

「お前のような妖怪を相手するのに余裕が、あるわけがない」

「ちよっと、こんな若々しい僕を前にして、さっきから失礼じゃな

「い？」

不敵な笑みを浮かべ、余裕のある陸とは対照的に綺礼は油断なくナイフを構え、すでに戦闘体勢になっている。そんな綺礼にニヤリと陸は、口をさらに歪める。

「やる気満々のところ悪いんだけど、今回ののは遠坂のせいだよ。誓って僕は今日は何もしてない」

「…遠坂だと」

訝し気な綺礼にさらに陸は、言葉を重ねる。

「遠坂家天下の宝刀うつかりだよ」

「……うつかりだとしても元を正せばお前のせいだろう。篠崎陸」
しかし、綺礼は構えを解かない。

「まあ、原因とかはどうでもいいよ。それより早く妹ちゃんのこといかなくていいの？」

死んじゃうよ。そう言葉を続ければ面白いように膨らむ殺気に、さらに口は歪む。

「入口は開けたまんまだから行ってらっしや〜い」

「戻ってきたら話してもらっ…」

「気がむいたらね〜」

部屋を出て行ってた綺礼の背中が見えなくなるまで手を振ると、「コーヒーをまた一口飲み、陸も消えた。」

・(前書き)

Fateの人気っぷりにビビってる作者です。

何はともあれ、お気に入り登録『50』到達ありがとうございます。

これからも頑張っていくますので宜しくお願いします。

感想や指摘もありがたいので、気楽にしてくださいって結構です。

暗い緑の闇。深海のようなそれはぬめりをもって絡み付く。饅えた匂いが鼻につくそこは、間桐の深淵にして魔術。マキリのために多くの命が散った場所。

暗転

母が生きながら餌となるのを見た。最初に四肢を、そして内臓を喰らい口内からはい出た蟲を最後に、意識を飛ばす。

暗転

次は少女が蟲に犯されるのを見た。既に心は引き裂かれ、髪も瞳も色を変えた姿に自分の罪を知った。そして誓う……。

暗転

誓いの始まり。身体を生きながらに喰われる恐怖を押さえ付け、痛みを耐え、流れる血も構わずに叫ぶ。

その果てに自分は何を得たのだろう。自殺し綺麗として再び此処に到ったのは何故だ…ああ、解らない。だが、これだけは解る……

(まだっ…死ね、な…い)

葵さんは笑っていた。今度こそ普通の家庭で幸せになれるのだろう。時臣は相変わらず嫌いだ…別のあいつがやったことは今だに理解できないし、したくもない…それでも少しは歩みよってもいいか

もしれない。 雁夜としてならそこで終わってもいいのかもしれない。 なんの未練もなく、安らかに逝けるだろう。

だが『言峰綺璃』はそれでどうなる。 今だに女言葉は慣れないし、スカートも長い髪もうっとおしい。 雁夜だったころの相違点でシヨツクを受けることも多々有る。

(それでも…俺は私として……)

暗転ではなく、覚醒

口と鼻を押さえ付けていた手が外され、呼吸が再開される。 だが、短くない時間止められていた所以か、意識に霞がかかる。 また急に空気が入り込んできたことで、咳も止まらない。 せめて、顔をぐらいは見てやろうと振り替えようとするが、首筋に手刀を叩きこまれ意識を完全に刈り取られる。 それでも気を失う瞬間、振り返り見えたものは懐かしい顔だった。

『Are you ?』

(あなたは ですか?) 『

…そっだ

『Do you want to become ?』

(あなたは になりたいですか?) 『

何度も同じことをいわせるな

『あなたは なるために“何が”できる?』

できるさ…なんだって。手段を選ばずなんだってしてきただろう
俺が“産まれてくるために”

「…なんだって」

『あなたは じゃないのに?』

「…だから本物の がいなくなればいいんだろ」

『あなたは を殺しましたか?』

「…俺は…」

…じゃあお前がいなくなれば俺が… になれるんだ
よな?…

『あなたは を殺しましたか?』

『あなたは を殺しましたか?』

『あなたは を殺しましたか?』

『あなたは を殺しましたか?』

『あなたは を殺しましたか?』

…俺、は…

『あなたは

を殺しましたか？』

浮遊感と響く靴音に目を覚ましてみれば、目の前に女性どころか男性までも、虜にしてしまいそうな美しい顔があった。

「へっ？」

「お目覚めかい、Ma petite chatte
「えーと…」」

言われた言葉の意味が一瞬分ならず、思考が停止するが今の体勢を思い出して一気に顔が熱くなる。

「とりあえず下ろして下さい！！」

俗にいう『お姫様抱っこ』というやつをされている綺麗、だが男は笑顔で封殺し足を運ぶ。

「貴女は出口を知らないでしょう？」

その言葉に自分が何処にいて何があったのかを思ひだし、上がっていた血がまた一気に落ちた。

「それに私がしたいので却下です」

極上の笑顔付きで言われたが、言っていることは自分勝手である。綺麗にとつたら恥ずかしいだけで、むしろ楽出来るし、あんなところも歩きたくないのでまあいっかど無理矢理、納得しようとしたとき気がついた。“足元は骸で覆われ、靴音など響くわけがない”こと。

「あなた何者？」

今もすっかりと靴音は響いている。さらに言うならばタイミングも良すぎる。自分が気を失ってどれだけ時間が過ぎたか知らないが、ピンチに現れて助けだすイケメンなんてどこのヒーローだ、って感じである。しかし現実にはヒーローなんていない。そう考えたとき一番可能性が高いのは、

(此処に落とした張本人…)

事故か、故意になのかはわからない。綺麗だつて母の友人だと聞いている、遠坂家の人達を疑うようなことはしたくない。

(だけど、さつき時臣に忠告されたとおりなら)

全ての魔術師は敵と思ってかからなければいけない。そしてこの男も魔術師…油断は禁物だ。警戒心をあらわにし、油断なく男を見る綺麗に初めて男の笑みが崩れ、その双眸は哀しみに揺れた。

「私は確かに魔術師でもあります。しかし今は貴女だけの騎士…聖誓(ゲツシュ)を…貴女だけは決して裏切らず、傷つけないという誓いをたてましょう」

足が止まった。

『壺』しかも“あの”篠崎陸お手製のえげつなさしかない代物に、妹が落ちたときいて視界が真っ赤になった。冷静さを失い思わずナイフを投げてしまったが、今思い返してもあれは失策だった。ナイフではなく黒鍵を全ての急所に同時に叩き込むべきだった。そこまでも、はたしてあの化け物を仕留められることは叶わないだろうが、傷くらいはつけられただろう。

(篠崎陸はああ言ったが…遠坂は巻き込まれただけだろう)

魔術師が、利にならず厄介事しかうまない篠崎陸の壺に、関わろうとするはずがない。

(入口は開けとくといっていたな)

篠崎陸は信用ならない人物だが、騙し、ごまかすことはあっても嘘を言うことだけは無い。

(待ってるよ…綺麗)

廊下を駆け抜け抜け地下へと、足を急がせた。

「『あなたは

を殺しましたか』…ね、ご主人様ってば

鬼畜〜」

男が晒う

「ほんと歪んでるよね…君もそう思わない？お兄さん」

「…なんのようだ飼い猫」

クスクスと肩を揺らして

「ヤダなく飼い猫じゃなくてチエシヤ猫って呼んで〜」

「変わらないだろうが」

虚構を誠に

「気分の問題。それにバレたら怖いでしょ？」

「……………」

「かわいい甥っ子に…ね」

誠を虚構に

「彼、知ったらどうするかな〜全部知ってる子飼いが側にいるって」

そして真実はそのままに

「それを嘆く権利は俺にない…」

「忠実だね〜」

全ては彼の掌の上

「第一幕はそろそろ閉幕〜ってね」

一人の壊れた男がいました。滑稽で歪なその生き様は、気まぐれな猫にたいそう気に入られました。

一人の壊れかけの男がいました。身の丈に合わない願いに焼かれ、壊れかけた男はいたく猫の主人に気に入られました。

地下のとある一室にそれはあった。魔術とはまた違った方法で閉ざされた入口を開けるには、本来ならば『鍵』が必要となる。だが、今回限りにつきそれは必要ない。開かれた扉に身を滑りこませ、不可視の螺旋階段を綺礼は飛び降りた。

黒鍵は手にしていない。この場に限り、武器を手に争うということとは愚行だ。何よりも必要となるのはスピード、全ての遮蔽物と争わず逃走出来るだけの速さ。

だが、そうは認識していても許せない光景が飛び降り着地した先にあった。妖怪もとい、化け物『篠崎陸』がまるで、騎士のように膝をつき最愛の妹の手に、接吻をおとそうとしているではないか。悩むこと、零コンマ一秒。全ての黒鍵を急所に向けて投擲した。無論、妹にはかすりもしないように配慮したうえで。………シスコンここに窮まりである。

「なっ…なにしてんのよ！！あんたも兄さんも！！」

いきなり膝をつかれたことにも、兄の武器が飛んできたことにも、少々困惑しながらも静止の声をあげる綺礼だが、とうの二人の耳には入っていないようだ。

綺礼にすら届いてないところを見ると、相当頭にきているらしい。綺礼が小さいころから、父親と一緒にチュツチュツしまくっていたんだから、未遂だし流せばいいでしょうとは本人の弁だが、そこまで大人ではなかったらしい。来年成人となるいい大人が何を、しているのだろうか。

「…やはり避けるか、篠崎陸」

「いきなり攻撃とは…それに俺は篠崎陸などという名前ではない」

「とぼけるな。そのたちの悪い呪いも、外見に反して性格が捩れ曲がっているのもまごうことなきお前の特徴だ」

「ほお…知っているのか」

「生後半年の妹に近づこうとして、母に蹴り飛ばされた時に聞いた……それと、いつまでその無駄にカツコつけた話し方をするつもりだ」

「これが地だ」

「嘘をつけ。普段は無駄に語尾を伸ばしているだろう、あっちもいらつくがそれよりましだ」

「だからそれは…」

(帰っていいかな…)

当初の緊迫した空気はどこにいったとツツコミたい綺璃だった。しかも話題がいつのまにか、いかに妹が素晴らしいかにすりかわっている。綺璃が産まれる前までは、寡黙やらストイックやら、言われていた兄は最近ポンコツ気味だ、主に今回のような場面で。それにしても……いい年の大人が二人して何をしてるんだろう

(出口もわかったし…うん。帰ろう)

関わるのも面倒になって出口に向かおうとした足は何故か動かない。不思議に思い、下を見れば

「妹ちゃん捕獲さあ、僕と一緒に帰ろうか」

兄と言い争っている謎のイケメンと、同じ顔の人物が床から上半身だけ生えていて、その手で足を掴んでいた。

結果グロくてスプラッタなものには耐性があるが、オカルトは苦手な綺璃は本日三度目となる気絶をしたのだった。

「ありやりやゝ妹ちゃんては病弱説マジな感じ〜？」
「おい…」

二ヨツキリ生えてきた篠崎がキャッチしたおかげで大事は避けられたが、篠崎の首元には二振りの剣が。右はいわずもがな綺礼、左は同じ顔した三倍くらいカッコつけてた謎の男。だが、篠崎は余裕な様子を崩さない。

「ちよつとー綺礼は最近ポンコツすぎゝ代行者の名が泣くよ…それと、忠犬は狂犬つれてさつさと帰れ」

一睨み。すると男は剣をひき、篠崎の腕の中の綺麗に視線をやると霞のように消えた。

「ふう…で、綺礼。冷静さはなくしちゃいけないよ」

「わかっている」

「それならいいけど〜からっぽだった男がこつも変わるとは、本当に人は飽きない…」

「何か言ったか？」

後半部分は聞こえなかったのだろう、綺礼が聞き返すが篠崎は笑ってごまかした。

本日三度目の覚醒の時、側にいたのは兄ではなく時臣だったことに綺璃は驚いた。

「なんで？」

「綺礼さんは父と修業中だ」

そこで会話が終わる。が、なぜか時臣は綺璃を相変わらずガン見している。

「えーと……」

「？…ああ、着替えなら母がやってくれた」

「いえ、そうじゃなくて……」

いろんなもので汚れていた服は着替えさせられ、流石あの母にしてこの友人あり、と思うような服だった。しかし綺璃のいいたいことはそうではなく、

「そんなに見られると、ちょっと……」

「……心配したんだよ、あの篠崎さんの壺に落ちたって聞いてたから」

今度は綺璃がガン見してしまう。

「意外？」

「ええ……」

「酷いね、僕はそんなに薄情にみえたかな」

「……………」

誰だコイツ。あつちの時臣だとかこつちの時臣だとか、そんなの関係無しにキャラが違いすぎる。

「婚約者の心配をするのは当たり前だと思っけど？」

さらには煌めく笑顔で爆弾も投下……本当に誰だコイツ。

「ふえっ!？」

それに綺璃はついていけない。しかも爆弾発言に思考が停止している。

「え、？誰が、誰の……」

「僕が綺璃の」

「……え？」

「だから、遠坂時臣が言峰綺璃の」

停止した頭では理解出来ず、二回三回と聞き返すが答えは変わらない。そこでやっと時臣と婚約関係にあることを理解……理解……理解……出来ずに叫んだ。それも今までの諸々を吐き出すように大音量で。

「そんなんじゃない淑女（レディー）失格だよ、綺璃」

しかしそれにも動じず笑顔のままの時臣。ありえない爽やかさ加減にバツクには輝く太陽と、風に揺れる草原が見える。

「……その話、本当なんですか？」

「その話って？」

「だからあなたと婚約か、んなあああああ!？」

だが、確かめる前に時臣の頭が発火したことで、それは最後まで言葉にならなかった。

「いたいな〜もう…時臣君ったら愛情表現が過激なんだから〜」

「気持ち悪いこと言わないでください、篠崎さん」

しかし炎が消えるとそこにあつたのは、無傷で立つ見たことのない男性。そして、目の前の人物に心底不愉快だともいいたげな顔をした時臣が、部屋の入口で宝石を構えて立っていた。

「つまり、婚約者ではなくてあくまで候補だと…」

「ああ、お互いに適齢期まで相手がいなかったらそうしましょうと、母と智由紀さんが…」

頭を押さえる時臣。珍しく二人の気持ちが重なったときだった。つまり……

「悪乗りもそこそこ〜って話だよ〜」

「お前がいうな!！」

間違っても目の前の男にだけは、言われたくない。

(だいたい、コロコロ顔が変わるってなんなの!?)

既に時臣でも、先程の謎の人物の顔でもない別人の顔になっている。にやけた表情をしているが、絶えずこちらを観察するような目が気持ち悪い…まるで、全てを見透かされているような…。

「なになに〜妹ちゃんてば僕に興味あるかんじ〜」

「っ…!!」

興味ではない。関わりたくがないために、その行動を避けるために見ていただけだ。だが、そんなことは目の前の男はわかっている。わかっていてなお、尋ね反応を楽しむ。本当にたちの悪い奴だ。

「ふ〜ん、妹ちゃんは〜僕みたいなのがタイプなんだ〜うれしいな」

「だから違うとい…:…はあ」

今度は飛んできたナイフに首を撥ねられた。しかし蜥蜴の尻尾のように生えてきた顔は笑顔。そしてそれはよりによって兄、言峰綺礼その人のものだった。途端、背後の殺気が膨れ上がる。

「わざと当たったな」

「え〜なんのこと?陸君わかんない」

黒鍵を構え、修羅と化した綺礼が這うような声で呟く。

「…屋敷内で暴れないで欲しいのですが…」

「そんなこと言いつつ、時臣君だってガント飛ばしてるじゃないか」

「これは自衛のための正統防衛です」

ガントが雨霞と降り注ぎ、黒鍵が唸りを上げて迫るが、篠崎は一つもくらわず、また飄々とした態度も崩さない。

「僕も君達で遊ぶのは楽しいんだけど、次のお仕事があるからね。」

「逃がすとも?」

「捕まえられるとも?」

途端、表情が一気に抜け落ち能面のようになる。それに二人が一瞬、気をとられた隙に篠崎はその身を窓から踊らせた。

「それじゃあ、皆さんごきげんよう。妹ちゃん…わからないことがあつたら白兔にきいてね。」

ウィンクを置き土産に篠崎陸は完全に姿を消した。

A c t 2 I c o u n d n ' t b e s u r e w h o h a d c o m

お気に入り登録1000越え、ありがとうございます^^O^^

とある男の話をしよう…

その男は伝説だった…いや、伝説であるのほうが正しいか。『戦いの王』と呼ばれ、一軍人から將軍まで上り詰め死後、その姿が英雄と語られ王となった。

だから男に王道たるものを聞いても答が、返ってくることはない。いかに周囲が王の中の王、救国の王等と騒ぎたてても、彼は軍人でしかなかった。生き残るために槍を手にし、そこには高い理想も願望もなかった。

ただ生きていたかった。男は晩年、家族に語ったそうだ。平穩で平和な生活を守るために、武器を手にしたにも関わらず…随分と遠い所に来てしまったものだ。

その姿は後に王と、英雄と語り継がれるものではなく一人の人でしかなかった。その夜、戦場で人生の大半を過ごした英雄は、家族に見守られ静かに息を引き取る。

その男は平凡であるが故に非凡を求め、常に自分は特別なのだと自負していた。だが、それはただの虚構で、男は平凡どころかそれを下回る、愚鈍で愚かな男だった。

だがある日、一冊の手帳を拾ったことで男の人生はがらりと変わる。それはなんの変哲もないただの手帳だった。強いて言えば、今時珍しいアンティークな鍵がついていたことくらいだろうか。薄い茶の革の表紙に、金を鍍金された細やかな細工の金具が打ち付けられ、これまた見事な細工の鍵がついていた。

男は鍵が開いていたことが幸いとはかりに手帳を開いた。中表紙の下に『Charles・Lutwidge』と几帳面な字でかか

れている他はなんの変哲もない手帳に、男は興味をなくし無造作に鞆にほうり込んだ。

だが、その手帳を拾ったことで男は、自分の理想という張りぼてを被ることに成功する。それから彼はカリスマとして君臨することとなるが、それは5年後の話。今はまだ愚鈍で愚かなただの男である。

張りぼてを望んでかぶったかどうかは別にして、二人は同じであった。だからこそ二人は出会うべきして出会ったのだろう。

『 …… 問おう、貴公が俺のマスターか 』

そして幕は再び上がり、物語は動き始める。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5942z/>

Fate/another Zero

2011年12月27日23時51分発行